

イデオロギーとしての客観報道主義

岡田直之

すべてのジャーナリストの目標は可能なかぎり
真実に近づくことではなければならない。しかし、
真実はいつも真ん中にあるとはかぎらない。真実
はふたつの均衡のとれた引用語句の平方根ではな
い。……倫理的に中立ではない事実もあるのだ。

ジャック・ニューウェル

一

現代のマス・メディアはこんにち、「アイデンティティ
の危機」に襲われているといわれている。⁽¹⁾ ニュース報道の

伝統的手法と明らかに衝突する圧力がマス・メディアに加
えられているからである。現代ジャーナリズムはたんに事
実の観察と情報の伝達だけでなく、その分析と総合化を要
請されており、その結果、ジャーナリストは好むと好まざ
るとにかかわらず、抜き差しならぬ価値判断にかかわらざ
るをえない情況に追いこまれている。現代マス・メディア
の「アイデンティティの危機」は、例の客観報道の原則が
動揺し、部分的に崩壊しながらも、あたらしいジャーナリ
ズムの理念と手法がいまだに確立されず、まして制度化さ
れていないことから発生している。現代ジャーナリズムを
「地獄と天国の中間地帯にある制度」として把握する根拠⁽²⁾

も、まさにこの点に求められる。

もちろん、客観報道の原則のはらむ問題性が顕在化してくるのは、けっして最近のことではないし、さらに客観性の觀念そのものについていうならば、十九世紀末ごろから、一部の思慮深い知識人や思想家がすでに「その概念全体に内在する錯覚の危険性」を感じしつづつあったといわれている。ちなみに、ヨーロッパ思想史家J・T・メルツは一八九六年に、客観性とは「人びとを支配してしまふ先入観からの解放ではなく、先入観の働きに気づかないことだ」というある批評家の皮肉な論評を引き合いにだしながら、「先入観を欠いた人はいっさいの精神装置を欠くことにもなるだろう」と警告を発している。二十世紀に入ると、ジャーナリズムの領域でも、ニュース報道の客観性をめぐって、疑義や異論が提示され始め、より分析的、解説的なニュース報道への志向が徐々に台頭してくる。アメリカのばあい、そうした報道形態への「転換点は一九二九年の大恐慌と、それに引き続く革命と戦争とであったといっても、まず間違いないと思う」と、W・リップマンは述べている。⁽⁴⁾こうして、一九三〇年代のニュー・デール時代の幕開きとともに、ストレート・ニュースを主体とするへふる

いジャーナリズムの限界が認識され始め、ニュース報道を「淡々たる事実の拘禁衣」に封じ込めなくなってくる。⁽⁵⁾

そして、全米新聞編集者協会は一九三三年の年次大会において、編集者が「もっと多くの注意と紙面を説明と解説のニュースにさき、平均的読者が事件の動向と意義をもっと十分に理解できるように情報の背景を提示すること」を勧告する決議文を可決する。⁽⁶⁾第二次世界大戦後、よく知られているように、プレス自由委員会は一九四七年の一般報告書で、「現代では事実を忠実に報道するだけではもはや十分でなく、事実についての真相を報道することが必要となっている」と述べた。⁽⁷⁾こうした情勢の展開とともに、客観ジャーナリズムをめぐって、「客観的であるということとは、もはやプレスの目標ではなく、それは迷信の呪物にすぎぬものとなった」という厳しい見解も提示されてくる。⁽⁸⁾そして、客観報道を補充するものとして、あるいはそれに代わるものとして、解説報道とか深層報道(depth reporting)、さらに問題発覚報道(investigative reporting)などといった新しい報道スタイルが提唱されてくるのである。

しかしながら、だからといって、客観報道の原則がすでに完全に崩れ落ちた偶像であるとはいえない。米誌『タイ

ム』は一九五三年に「客観性の物神崇拜」と題する論評を掲げたが、その内容は今日においても示唆的である。「ジャーナリズムの最大の欺瞞的な決まり文句のひとつは、ニュース記事はつねに〈事実をして語らしめる〉べきだということである。思慮深い報道人であるならば、そんなことはほとんど不可能であつて、誠実なジャーナリストが然るべき方法と視座のもとで事実を語る——したがつて解釈する——ときに、はじめて事実が明解になることを知っている。にもかかわらず、紙面のもっとも短い記事でさえ、実際には解説報道であるといつてもよいのに、アメリカの多くの編集者はいままお解説報道を忌み嫌い、〈客観性〉の物神崇拜に固執している」。

こうした客観性への根強い物神崇拜は詰まるところ、固有の歴史的背景から生みだされたと考えねばならない。周知のように、客観ジャーナリズムはもとより商業主義的動機に深く根ざしており、新聞の大衆化とともに、政治的、イデオロギー的に分散した異質的で大量の受け手に受容されるのに、もっとも適合したニュース報道形式として考案され、プロフェッショナルな規範にまで昇華された。ちなみに、F・S・シーバートはアメリカにおける客観報道の

発展に関連して、「アメリカ・ジャーナリズムへの客観報道のひろがりには、プレスの政治的党派性の衰亡と、意見新聞からニュース媒体への新聞の変容とによって促進された。広告の発達や、発行部数を増大させようとする衝動も、また、客観性の理想が一般に受け容れられるようになることにあずかつて力のあつたものである」と述べている⁽¹⁰⁾。したがつて、現代マスコミの商業主義的体質が根本的に変容しないかぎり、客観報道主義は時代の風圧を受けて風化しながらも、なおかつ、その本質を根づよく温存し続けるであらう。

二

客観報道の原則とは、「ニュースを客観的に、個人の意見の押しつけや説明なしに書き、かつ、ことの一面だけでなくあらゆる面を報道しようと努力」することである⁽¹¹⁾。ニュース欄にストレート・ニュース(事実)を、論説欄に意見と主張を、という編集スタイルは客観報道ジャーナリズムに欠くことのできぬ手法であつたし、へ「ニュース解説」のレットルとか、あるいは署名入り記事も、客観報道ジャー

ナリズムの境界線を維持するのに欠くことのできぬ紙面製作上の方式であった。さらに、客観報道の原則を貫徹するために、組織的チェック装置も設けられた。取材記者による原稿はデスクと整理部という編集過程における関門を通過することによって、より客観の記事に仕立てられていく、と一般に信じられている。要するに、客観報道の原則はジャーナリストに、なによりも事件の忠実な観察者であり、記録者であることを要求するのである。事実、「ニュース」に関する西欧的考え方は、記述されるべき現実が外部に存在するという前提に依拠⁽¹²⁾し、「現実の反映」がニュースである、と考えられてきた。

しかしながら、実際には、ニュース・メディアは社会的現実のたんなる反射鏡ではなく、むしろ社会的現実の諸現象をなんらかの程度において屈折して映し出すリズムであった。W・リップマンは、つぎのように述べている。「ニュースは社会情勢の反射鏡ではなく、ある突出した側面に関する報道である⁽¹³⁾」と。ドラマチックなもの、尋常ならざるもの、予期せざるもの、この種の出来事がニュースとして報道されやすいというのだ。したがって、ニュースは社会的現実の忠実なコピーではなく、ある特定の観点か

ら選択され、屈折された現実像である。このかぎり、受け手は多かれ少なかれ社会的現実の歪んだ映像をマス・メディアから受けとることになる。

L・マーケルはニュース報道における選択的判断過程について、ジャーナリストらしい具体的筆致で、つぎのように述べている。「もっとも客観的な記者であるならば、五十の事実を集める。この五十の事実から十二を選んで、記事のなかに織りこむ（紙面には、限界があるのだから）。こうして、かれは三十八の事実を放棄する。これが第一の判断である。／つぎに、記者あるいは編集者がいずれの事実を記事の最初の節におくか決定する。こうして、ひとつの事実が他の十一の事実よりも強調されることになる。これが第二の判断である。／それから、その記事を第一面にのせるか、それとも第十二面にのせるかを、編集者は決定する。第一面ならば、第十二面のばあいにくらべて何倍もの注目を集めるだろう。これが第三の判断である⁽¹⁴⁾」。もちろん、現実のニュース取材と編集はもっと複雑で入り組んだ選択と判断の過程を経過するにしても、このマーケルの記述は、客観報道といえども、ジャーナリストのプロフェッショナルな判断が幾重にも浸透せざるをえないことを、い

わば標本的に示してくれる。

こうした背景で考えると、「ニュースはすべて見解である」というG・ガープナーの主張は、かならずしも唐突ではなくなってくる。この命題によると、「なにを公にし、なにを公にしないか(さらに、どのような扱い方をするか、なにを強調するかなど)を決める編集上の選択パターンはすべてメディアの構造的諸特性に根ざすイデオロギー的基盤と政治的次元とをもつ」ことになる。⁽¹⁶⁾ 政党紙のばあいはもちろんのことだが、商業紙のばあいにも、政治ニュースのみならず非政治的ニュースでさえ、こうしたイデオロギー的視座と政治的傾向を内包する。

この命題の妥当性を検証するために、ガープナーは、フランスの左右両翼紙と商業紙がある犯罪事件を、どのように報道したかの事例研究を試みた。「アミエル事件」とよばれたこの事件は、ピレネー山脈のふもとの地方都市で、一九五八年六月二十三日夜に起きた。聖ヨハネの祭日を祝い、若者たちは恒例の悪ふざけを楽しんでいた。かれらは郊外にまで足をのびし、静寂な住宅街の家々の郵便箱に爆竹を仕掛けたりした。中学校の英語教師ジャン・アミエルの家も、ご多分にもれず、若者たちの悪ふざけで三晩にわ

たって悩まされ続けた。アミエル夫人は気分がすぐれず、子どもたちの安眠も妨げられた。ジャン・アミエルは悪童どもをこけおどして追い払うために、ピストルの使用許可を警察からもらい、暗夜にむけて三発を威嚇発砲した。ひとりの中学生が倒れ、病院に運ばれる途中で死亡する。当直のインタン医師は、その少年が転倒したさいにおうた背骨への打撲を死因と診断した。検視官はその診断を否認して、死者の首の後部に小さな弾痕のあることを確認した。世論は激昂し、黒山のような群集がアミエル家のまわり押しかけた。ほぼ一年後に、裁判が始まり、アミエルは懲役二年、二五〇万フランの慰謝料支払いを言い渡された。二年後に、アミエル一家はいずこかに立ち去り、その犯罪事件は人びとの記憶からも消え去っていった。

なんの政治的背景もたぬこの犯罪事件の新聞報道に、実は、右翼紙、商業紙、左翼紙といった各紙の異なるイデオロギー上の政治的立場が微妙に投影されていることを、ガープナーは「命題分析」と名づけた内容分析の手法によって実証的に明らかにした。そして、「非イデオロギー的、非政治的、非党派的なニュースの収集、報道システムが根底において成り立たぬという命題」の妥当性が裏づけられ

たこと、とりわけ「商業紙が固有のイデオロギー的統制と政治的傾向から自由であるという仮説への裏づけを發見できなかつた」ことを結論として述べている。¹⁹⁾

この事例研究が示唆するように、客観報道主義の理念と実態には、事実上の断絶がある。それにもかかわらず、その理念なり原則がいまなお現代ジャーナリズムの職業的規範としてジャーナリストの報道行為を規制するとともに、現実があたかも理念どおりに作動しているかのような錯覚や幻想を受け手にあたえるところならば、それはまさしく現実の実体を隠蔽するイデオロギー機能であるといわざるをえないし、現代のマスコミやジャーナリストがこの原則を楯に、みずからのコミュニケーション行為を正当化するならば、それもすこぶるイデオロギッシュな現象であるといふほかはない。

客観性の観念を、外部からのありうべき批判を封殺するための「戦略的儀礼」として把握する試みも、客観報道主義のはらむイデオロギー機能に照明をあてていると考えてよい。「社会科学者と同様に、〈客観性〉の用語はジャーナリストにとって、批判者からかれら自身をまもる防波堤として機能する。〈事実〉の提示のしかたに問題があると攻

撃されるとき、地中海沿岸の農夫が悪霊を払いのけるために首のまわりにニンニクの球根を巻きつけるように、新聞記者は客観性の呪文を唱える」と、G・タッチマンは述べている。¹⁷⁾ここで、〈儀礼〉とは、「追求される目的とまずほとんど関連のない、あるいはごくわずかな関連しかもたぬ定型的手法」のこと、また〈戦略〉とは、「相手の攻撃に先んじて攻撃をかける」とか、あるいは守勢的に批判をかかわすために用いる戦術」のことを意味している。¹⁸⁾

それでは、客観性の主張を正当化する戦略的儀礼として、どんな形式や手法が具体的に考えられるのか。タッチマンはニュース制作過程の参与観察にもとづいて、つぎのような四つの戦略的方法を抽出した。すなわち、(1)相反する可能性を提示すること、(2)証拠の裏づけを提出すること、(3)引用符の巧みな活用、(4)適切な順序で情報を構成すること。これらの方法に準拠することによって、ジャーナリストはニュース記事の客観性を主張できるといっているのである。¹⁹⁾

第一の方法はいうまでもなく、意見の対立する論争的問題の報道にあたって、一方の意見や主張だけを報道するのではなく、予想される対立者や反対者の異見や反論も同時に

報道せよということである。たとえば、ある人の発言内容が真実であるかどうか確定できぬとしても、その発言内容が社会的重要性や意義をもつと考えられるばあい、新聞記者は「X氏がAと述べた」という〈事実〉を報道できる。しかし、この発言内容が論争をはらむ問題であるならば、X氏の主張だけを報道すると、その主張に賛成であるのかのような印象を読者に与え、偏向の批判を浴びることになりかねない。そこで、X氏の見解に反対したり、その見解を否定する立場の人の発言を同時に掲載すれば、客観報道という主張を展開できるというのである。

第二の方法については、とくに説明はいらないが、この証拠の裏づけの提示は多くのばあい、「事実の積み重ね」であり、しかも「真実である」と一般に受けいれられている「事実」をつけくわえるならば、客観性の裏づけを主張できる。第三の方法では、引用符の使用によって、引用文中の意見や主張が自分の個人的意見とは無関係であることを、ジャーナリストは主張できる。したがって、引用符は記事の客観性を予告するシグナルのようなものである。ジャーナリストはこの手法を逆手にとり、立場をおなじくする第三者の口をかりて、自己の個人的意見を間接的に表明す

ることも不可能ではない。

第四の方法については、情報を適切な順序で構成するための標準的手法は、もっとも重要な情報を最初に配置する逆ピラミッド型である。情報の重要性は一般にジャーナリストの専門的なニュース価値判断によって決定されるために、記事の客観性を標示する形式としては、他のものにくらべてもっとも問題をふくむと考えられる。複数の諸事実のなかで、どの事実がより重要であるかを選択する行為は形式の範疇をこえて、内容の範疇にかかわらざるをえず、ジャーナリストの価値判断が主導的役割を演じてくるからである。そして、ジャーナリストはふつう専門的知識にもとづくニュース価値判断の妥当性を主張する。

タッチマンの示唆するように、ニュース報道の客観性を企図するこれらの儀法は、(1)ジャーナリストの選択的知覚メカニズムの作動を曖昧にし、(2)「事実をして語らしめる」という誤った前提から成り立ち、(3)ジャーナリストの個人的意見をニュース記事に織りこむ手段として悪用され、(4)編集政策によるニュース報道の規制を軽視させ、(5)ストレート・ニュースよりもニュース解説を不当に重視させる点において、要するに客観報道の実態を誤認させる点におい

て、客観的にはイデオロギー機能をはたしているといえよう。⁽²⁰⁾

と同時に、これらのニュース報道の手法はいずれも客観性を主張するための形式的根拠になりえても、客観性そのものを保証する根拠にはなりえない。これらの手法に頼っても、ニュース報道の真の客観性の確保という究極的目標を達することはできない。ここにおいて、問題は一巡して、振りだしに戻る。ニュース報道の客観性そのものの基準は、いったい何かという認識論的問題である。ニュースが客観的であるという主張を正当化するために、どうすべきかを考えるのではなく、ニュース報道における客観性とは何かについて、われわれは考察しなければならぬ。それはニュース手法の客観性ではなく、ニュース認識の客観性を問うことにほかならない。

三

すでに明らかなように、ニュースはけっして無色透明な情報ではなく、なんらかの見解を潜在的に内包する情報である。したがって、「どんなに意見との混在を排した事実

だけのニュース報道でも、その背後にはかならず一定の方向性をもった〈主観〉を潜在させている⁽²¹⁾”といつてよい。とするならば、客観報道主義は明らかに内在的矛盾をはらむことになる。なぜならば、一方では理念的に特定の価値観点に立つことを拒否しながら、他方で現実にはなんらかの価値観点に立たざるをえないからである。ニュースの背景や底流を掘りさげて、全体的文脈のなかで位置づけようとすればするほど、矛盾は拡大する。

この内在的矛盾はより一般的には、「非政治的な〈客観的〉観点と、〈意見〉から区別された〈事実〉だけを発見し、報道することにひたすらコミットする」自由主義ジャーナリズムの内包する矛盾にほかならない。⁽²²⁾自由主義ジャーナリズムを支える客観的諸条件が有効に作用しえたかぎりには、問題はほとんど顕在化しなかった。J・W・ケアリーが指摘したように、「価値観、目的、忠誠に関する大幅な合意」が存在し、「事実を解釈するための一般的に容認された基準と、政治的価値と目標に関する一連の同意とが存在する」ばあい、もっぱら事実を提供する客観ジャーナリズムは円滑に機能しえた。⁽²³⁾しかしながら、社会的、政治的利害の分裂と対立とともに、共通の等質的な価値基準は

崩壊し始め、客観報道主義の内在的矛盾はやにわに露頭し、深刻化する。

この内在的矛盾の明快な解決方法はいうまでもなく、明確なイデオロギー的観点に立つ党派ジャーナリズムへの脱皮である。ニュー・ジャーナリズムは明らかに、この方向をめざしている。しかし、巨大化し、寡占化した現代ジャーナリズムに、この方向をもとめることは事実上不可能であらうし、またかえって有害な結果をもたらす危険性もあるだろう。実際の方向はむしろ、内在的矛盾を意識的に持続させることである。そのためには、客観報道主義の物神崇拜とイデオロギー的虚偽性を打ち碎き、ニュース報道はなんらかの観点に立つことなくして、現実に行しえぬことをリアルに認識して、自己の価値観点を抑圧するのではなく、自覚的に統制しながら、社会現象のアクチュアリテイに對目的に迫っていくことが必要であると思われる。いかえれば、ジャーナリストは客観性と主観性を機械的に分離するのではなく、両者を弁別しながらも最終的に両者を統一する知的営為の弁証法を身につけなければならないし、ニュース報道を基本的にすぐれて主体的認識行為の所産であると確信するジャーナリストの報道行為こそ、真の

客観性への道にとうじるといふ逆説を深く認識しなければならない。没主観的な、あるいは主観を括弧にいれた客観報道ではなく、むしろ主体性の貫通する客観報道であるときに、かえってニュース報道の客観的妥当性が真に確保されるのである。

森恭三はかつて、ニュース価値についてX・Y・Zという三本の軸を立てて判断する、と述べたことがある。すなわち、「X軸は縦の線であつて、過去から現在をへて未来にいたる、いわば歴史の感覚である。Y軸は横の線で、現在の時点における、もろもろの事件や現象との関係を考える、いわばバランスの感覚である。(中略)それは(Z軸のこと―筆者注)ゾルレン(当為)の線で、目的意思といつてもよいし、価値観と考へてもらつてもよい。ニュースにたいし、受動的に立ち向かうのではなく、こうすべきだ、こうあるべきだ、という観点から、ニュースを発掘する態度である」⁽²⁴⁾。ここには、ニュース報道におけるジャーナリストの目的意思、価値観、問題意識の基軸的役割が明確に示唆されている。また、「真の事実とは主観のことなのだ。主観的事実こそ本当の事実である」⁽²⁵⁾という本多勝一の多分に挑発的な主張も、やはり同根の問題を提起している。報道

行為におけるジャーナリストの問題意識、その根底にある価値観ないし思想の根幹性と不可欠性を主張するこうした見解は、貴重なジャーナリズム実践から帰納されたものだけに、磐石の重みをもつといわねばならない。

ジャーナリストの思想に深く根ざす報道行為は、事実の報道から真実の報道へとよりダイナミックな展開を遂げていくであろう。もちろん、両者はけっして二律背反の関係にあるわけではない。なるほど、真実の報道は事実の報道そのものから自動的に流出しないけれども、真実の報道は現実の事実なしには成立しえないからである。事実の報道は社会的現実や出来事の断片と部分を反射することで成立するが、真実の報道はそれらの断片と部分をなんらかの価値観点に基づき全体的文脈に位置づけて解釈をくわえ統合するさいに、はじめて可能になる。

ニュース報道における事実性と真実性に関連して、高橋和巳はいかにも文学者らしい洞察眼で、つぎのように述べている。「報道は、あることが何月何日何処でどのように行なわれたかという写真的な記述と複数の証言によってその事実性を保証される。しかし、それはまだ真実ではない。報道の真実性は、一定の状況の中での、書き手と書か

れるものとの関係のぬきさしならぬ絶対性から生まれてくる。関係の絶対性というのは、なにも互いが相擁し肩をたたき合うということではない。それが偶然の出会いであり、必ずしも意志の疎遠はなくとも、一つの事態や事件を記述することについての反省の深さによっても生まれうる。(中略) 洞察や観察の正当性は、照りかえして自己自身を覗んだときのありようにかかっている。自分が何者であるかが見えていないと、見ることは、一つの特権的な座であるというにすぎない。／ほとんど同じことを見てきても、見る者の自己洞察の深淺やその態度のありようによって、事態は単なる事実にも終れば、人間の内面とつながる真実へと接近もする」⁽²⁶⁾。要するに、ジャーナリストの自己反省と自己洞察が事実の報道から真実の報道への転轍手の役割をはたすということである。そして、自己反省と自己洞察を欠いた、あるいは希薄なジャーナリズムはそれ自体巨大なへ見る悪魔であるという断罪は、客観報道主義の盲点をすどく突いている。

ニュース報道の質は結局のところ、ジャーナリストの思想性の深さにかかわっている。ジャーナリストはなんらかの思想的基盤に立つことによって、はじめて取材・報道の

対象や情況と自己との抜き差しならぬ絶対性を保持でき
 る。この關係の絶対性とは、いわばシュッセンの世界と考
 えることもできる。〈在るもの〉(ザイン)と〈在るべきも
 の〉(ソルレン)との対立と緊張のなかで、「自分はこうある
 ほかはない」と決断し、事件や情況を己自身の鏡に映しだ
 すとき、その〈時代像〉や〈現実像〉は確実なブクチュ
 リチュをもつのである。しかるに、客観報道主義が結果的
 にジャーナリストの思想的営為と人間の感情の表出とを不
 当に阻害し、抑制する機能を果たすとすれば、それは
 ジャーナリズムの恐るべき自己否定であり、恐るべき自殺
 行為であるといわねばならぬ。

[注]

- (1) Bagdikian, B. H., "The Press and Its Crisis of Identity," W. K. Agee (ed.), *Mass Media in a Free Society*, 1969, pp. 2-14.
- (2) Weaver, P. H., "The New Journalism and the Old —Thoughts after Watergate," *The Public Interest*, No. 35 (Spring 1974), 67-88, p. 68.
- (3) Macrorie, K., "Objectivity: Dead or Alive?," *Journalism Quarterly*, Vol. 36, No. 2 (Spring 1959), 145-

150, p. 146.

- (4) Roshco, B., *Neusmaking*, 1975, p. 43.
- (5) Rivers, W. L., Peterson, T. and Jensen, J. W., *The Mass Media and Modern Society*, 1971 (second edition), p. 187.
- (6) Roshco, B., *op. cit.*, p. 43.
- (7) 米國プレスの自由委員会(日本新聞協会編集部訳)『新聞の自由と責任——新聞、ラジオ、映画、雑誌など大衆通信機關に関する一般報告書』日本新聞協会、一九四八年、三二頁。
- (8) F. S. シーバート, T. A. ピータスン, W. シェラ
 ヲ(内川芳美訳)『プレス・ロウの自由に関する四理論』東
 京創元社、一九五九年、一六〇頁。
- (9) Roshco, B., *op. cit.*, pp. 49-50.
- (10) F. S. シーバート, T. A. ピータスン, W. シェラ
 ヲ(内川芳美訳)前掲書、一一二—一二三頁。
- (11) 同書、一六〇頁。
- (12) Molotch, H. and Lester, M., "News as Purposive Behavior: On the Strategic Use of Routine Events, Accidents, and Scandals," *American Sociological Review*, Vol. 39, No. 1 (February 1974), 101-112, p. 105.

- (13) Lippmann, W., *Public Opinion*, 1922, p. 341. (田中靖政ほか訳『世論』世界大思想全集25、河出書房新社、一九六三年、二一八頁)。
- (14) Rivers, W. L., Peterson, T. and Jensen, J. W., *op. cit.*, p. 188.
- (15) Gerbner, G., "Ideological Perspectives and Political Tendencies in News Reporting," *Journalism Quarterly*, Vol. 41, No. 4 (Autumn 1964), 495-508, 516, p. 495.
- (16) *Ibid.*, p. 508, p. 516. なお、分析対象になつた新聞は、(1)右翼紙系として「ロロール」「ル・フイガロ」「ミディ・リブル」、(2)商業紙系として「フランス・ソワール」「パリジャン・リブレ」「ランデペンダン」、(3)左翼紙系として「リャマニチ」「リュシオン」「ル・プロヴァンサル」の総計九紙であり、商業紙は全体として右翼紙系との連関が深く、これを明らかにして置く。
- (17) Tuchman, G., "Objectivity as Strategic Ritual: An Examination of Newsmen's Notions of Objectivity," *American Journal of Sociology*, Vol. 77, No. 4 (January 1972), 660-679, p. 660.
- (18) *Ibid.*, p. 661.
- (19) *Ibid.*, pp. 665-671.
- (20) *Ibid.*, p. 676.
- (21) 稲葉三千男『現代ジャーナリズム批判』青木書店、一九七七年、二〇二頁。
- (22) Weaver, P. H., *op. cit.*, pp. 69-70.
- (23) Carey, J. W., "The Communications Revolution and the Professional Communicator." P. Halmos (ed.), *The Sociology of Mass Media Communicators* (The Sociological Review: Monograph No. 13), 1969, p. 35.
- (24) 森恭三『新聞と道徳』『新聞研究』一九六三年一月号、一一頁。
- (25) 本多勝一『事実とは何か』未來社、一九七一年、九頁。
- (26) 高橋和巳『見る悪魔』高橋和巳作品集七(エッセイ集1)『河出書房新社、一九七〇年、一七五頁。』